

No. **50** 号
2026年5月号
(令和8年)

ひらつかの風

ひらつか市民活動センターは、さまざまな分野の市民活動団体やボランティアなどで活動されている人たちが、これから活動しようとしている人々を応援します。



CONTENTS

P.1～2 ……対談「NPO法人の運営と課題そして未来への展望」
フードバンク湘南 × pena

P.3～4 …… 団体レポート ①親の会パレット
②セーフスペースカフェここ*LOCO
③平塚パトロール

『ひらつかの風』50号発行にあたって …

ひらつか市民活動センターが発行する市民活動情報紙は、2018年に『ひらつかの風』としてリニューアル(隔月発行)し、地域で活動する団体の紹介やお役立ち情報を掲載してきました。この5月号で、ついに50号を迎えます。

節目となる今回は、特集として「ひらつかのNPO・市民活動の現状と地域の課題」をテーマに、特に顕著な地域課題に取り組む団体の活動をレポートしました。

NPO法(特定非営利活動促進法)が施行された1998年12月から27年。この間、平塚市内でも多くの市民活動団体が、地域の課題解決に向けて多様な分野で活動を続けています。団体の取り組みを丁寧に見ていくと、社会の変化や地域の課題がどのように現れてきたのかが、まるで地層のように浮かび上がってきます。

一方で、人口減少社会の中、市民活動の現場も例外ではなく、人材不足という大きな課題を抱えています。

今回のレポートが、地域の現状を知るきっかけとなり、そして「少し手伝ってみようかな」と思ったださる方が一人でも増えたら、これほど嬉しいことはありません。



特集1

対談「NPO法人の運営と課題そして未来への展望」

出席者 ● 認定NPO法人「フードバンク湘南」
理事長 大関めぐみさん



NPO法人 [pena]
理事長 坂上彩さん



進行 ● センター長 坂田美保子



坂田(以下S): 本日はセンターにご登録いただいている2つのNPO法人の理事長にお越しいただきました。大関さん、坂上さん、よろしくお願いいたします。

まずは日頃どのような活動を行っているのか、簡単にご紹介ください。

◆地域の中で生まれた2つの活動◆

大関さん(以下O): フードバンク湘南は2017年7月、食品ロス削減を目的として企業・農家・一般家庭より食品の寄贈を受け、ひとり親家庭や支援を必要とされる方、児童福祉施設などへ無償提供することで貧困問題の解決を目指して活動を開始、翌2018年に法人化、2022年に認定NPO法人となりました。寄付者の税制優遇により組織運営の安定化を図っています。

坂上さん(以下A): penaは2021年に活動を始め、2500g未滿で生まれたリトルベビーと家族の支援を行っています。実は私の娘も370gで生まれた超低出生体重児なんです。当事者同士の交流会や普及啓発、笑顔で子育てができる社会の実現に向けた提言活動を行い、2024年に法人化しました。

(次ページに続く→)



▲[pena]の坂上さん



▲「フードバンク湘南」の大関さん

団体レポート

◆NPOが抱える“現実”と向き合う◆

S: NPOの運営は「人・資金・情報」が課題と言われています。特に資金調達が大きな課題と思いますが、どのような工夫をされていますか？

O: 私どもは食料を保管する倉庫・事務所が必須のため、家賃や光熱費、食材の運搬費といった固定費の捻出が大きな課題です。この4月に事務所を移転しましたが、安定した資金確保としてマンスリーサポーターの充実を図るため助成金を活用し外部人材の協力を得ることにしました。

A: penaは事務局体制が弱く、理解ある税理士と出会い経理負担が軽減。昨年秋には神奈川県から委託を受け、リトルベビーピアサポート交流会や相談事業を実施できるようになりました。安定的な財源が確保できないと外部人材の協力も得られませんね。



◀坂上さん(左)と大関さん

◆協働がもたらした大きな変化◆

Q: フードバンク湘南は過去に平塚市の提案型協働事業を実施しました。成果について教えてください。

O: 協働事業では「フードバンク業務管理システム」(Webアプリ)を開発しました。全国で初めて導入したこのシステムにより、「食品の寄贈～保管～提供」にかかる全ての処理がシステム上で管理・確認できるようになりました。安心してご寄贈いただけますし、食品廃棄に掛かるコストも軽減できます。このシステムは全国のフードバンク推進協議会で使用され、農水省や他県から視察もありました。現時点での食支援も40トンを超えています。また協働事業をきっかけにSDGsサポーター企業制度を設け、平塚市内で45社を超える企業からご支援をいただいています。協働事業によって大きな信用が得られたことは何よりの成果です。

<https://foodbank-shonan.com/contribution/page-4124>

◆当事者の声を届けるために◆

Q: 協働事業を行った結果、活動が飛躍したんですね。

さて、penaは活動エリアを平塚に留めず神奈川県下で展開されていますね。

A: より多くの当事者を支援するため、人口の多い市町で活動することが多いです。penaの活動は子どもでも医療でもなく、障がい者支援でもない狭間の活動なんです。母親は小さく生んだことへの自責や、病気や障がいへの不安を抱えています。母子健康手帳は正常産を基準に作られているため、1000g未満で産まれた場合、成長を記録できません。そこでリトルベビーハンドブックを作りました(※現在は母子健康手帳も0gからに改定)。先日は神奈川県との協働で、誰もが安心して搾乳できる環境を整えるため「搾乳できます」というシンボルマークを作成しました。

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/cz6/f423.html>

◆未来に向けた一歩◆

S: お二方とも熱意をもって素晴らしい活動をなさっていますね。さて、今後の展望について伺います。

O: 現在常勤2名、非常勤2名のスタッフにも恵まれ、広報に力を入れたいというメンバーも出てきました。活動をはじめて9年、ようやく組織らしくなってきたように思います。今後は安定的な資金確保に向け、SDGsパートナー企業向けの広報誌やロゴ掲載の取り組みを進めたいと考えています。

A: 私は認定NPO法人取得を目指します。大関さんの話を伺って、その思いをさらに強くしました。応援して下さる企業さんにメリットがあるようにしたいですし、安定した財源があれば事務局を置くこともできます。今の状態を改善し、活動に専念できるようにしたいです。

S: ありがとうございます。最後に一言お願いします。

O: ここまで活動して来られたのは、市民活動センターのサポートがあったからなんです。法人格取得から広報・運営の悩みまで丁寧に对应して下さり感謝しています。

A: 私は少し先に行く大関さんと知り合えたことが何より嬉しいです。大関さんを追いかけて頑張ります。これからもいろいろ教えてください。もちろん活動センターのサポートもよろしくお願いします。

S: お2人のお話を伺い、地域におけるNPOの役割は益々重要になると感じました。私も引き続き、頼りになるセンターを目指していきたいと思います。本日はありがとうございました。



①不登校の子どもを支える「親の会パレット」

■親が安心できる場所から、子どもを支える

不登校の子どもを支える「親の会パレット」は、同じ悩みを抱える親たちが集う場です。2009年に前身団体から引き継がれ、現在は代表の三浦さんが運営しています。三浦さん自身もかつては利用者で、フリースペースに通う中で「親同士が支え合う場の大切さ」を実感したと語ります。

■“誰か来るかもしれない”と場を開き続けて

前代表の退任をきっかけに運営を引き継いだ当初は、参加者がほとんどおらず、一人で待ち続ける日々が続いたそうです。それでも「誰か来るかもしれない」と場を開き続け、やがて口コミで少しずつ人が集まるようになりました。現在も会員制は設けず、必要な人が訪れ、離れていく自由な場を大切にしています。こうした“出入りの自由さ”が、親が安心して話せる雰囲気につながっています。

■“解決”ではなく“共有”を大切にする場

親の会は、専門家ではなく同じ体験を持つ親たちの集まりだからこそ、分かち合いが生まれます。活動の中心は「解決」ではなく「共有」です。三浦さんは「とにかく話を聞くことが一番難しい」と話します。辛い経験をしてきたからこそ助言したくなるものの、それが相手を追い詰めることもあります。そのため、否定せず、ただひたすらに話を聴く姿勢を大切にしています。



Instagramはこちらから

特集2

地域で活動をしている団体のご紹介



今回の特集号第2弾では、地域で活動を続けている3つの団体取材しました。不登校の子どもと親を支える「親の会パレット」、困難な状況にある女性が安心して過ごせる場を提供する「セーフスペースカフェ ここ*LOCO」、そして路上生活者の見守りを続ける「平塚パトロール」です。

親の会パレットは17年、平塚パトロールは25年と、いずれも長い年月をかけて地域に寄り添ってきました。その歩みの中で、社会の変化を肌で感じてきたと語ります。それぞれの現場で見えてきた課題や、活動を続ける理由、そして支援のかたちを紹介します。

■親が落ち着くことが、子どもの支えになる

不登校をめぐる環境は変化し、情報は増えましたが、進学や将来の節目には不安が再び強まります。「大丈夫と思えても、受験が近づくと揺れる」と三浦さんは言います。だからこそ、まず親自身が落ち着くことが重要だと強調します。

「家庭が安心できる場所であれば、子どもは考える余裕を持ってない」。無理に外へ出すのではなく、家で安心して過ごせることが出発点になります。そして「どんな状態でも子どもを信じて味方である」ことが、子どもにとっての支えになると語ります。



▲代表の三浦さん

不登校を考える会 親の会パレット

元気が衰えていた我が子が、ある日を境に全く行かなくなったり、涙の嵐を繰り返す姿が、親の心を打ち抜く。同じ経験を持つ親同士が支え合える場。不安や悩みを共有し、互いの経験から学び、子どもを信じて支え合える場。親子関係の改善を図る。親子関係の改善を図る。親子関係の改善を図る。

定例会

日時：毎月第2木曜日 10:00~12:30
場所：ひらつか市民活動センター
(平塚市見付1-1-1 2階) 平塚駅前西口徒歩8分

● 子育てが辛い、不安な気持ちを話せる場。
● 親の経験が子どもを支える。子どもが動きます。
● 子育てが辛い、不安な気持ちを話せる場。
● 親の経験が子どもを支える。子どもが動きます。

お問い合わせ：三浦さん 親の会パレット (三浦さつ子)
090-6167-9812
otamay9@gmail.com QRコード



定例会の案内リーフレット▶

■“不登校でも大丈夫”という視点を広げたい

学校との連携には課題が残り、「学校に戻す」ことを前提とした考え方は根強くあります。親の会の存在も十分に知られておらず、支援が届かないケースもあります。三浦さんは、親の会や民間団体の知見を生かし、学校と親がともに不登校に向き合う視点が重要だと話します。今後は、親の会という居場所を大切にしながら、専門家等による講演活動などを通じて理解を広げていく考えです。「すぐに大きく変えることは難しい。まずはできるところから少しずつ。自身も辛い時期を経て「不登校でもいいんだ」と思えるようになったからこそ、孤立する親を一人でも減らしたいという強い思いがあります。

■親が安心できる時、子どもは前を向き始める

「不登校は人生の終わりではない」。活動を通じて見てきた多くの事例が、その言葉を裏付けています。遠回りに見える道も、後から振り返れば意味を持つことがあります。だからこそ三浦さんは、「親の心を支えることが、子どもの支援になる」と語ります。親が安心できる時、子どももまた自分のペースで前を向き始めます。

親の会パレット定例会●毎月第2木曜日 10:00 ~ 12:30
場所●ひらつか市民活動センター

②(公財)日本YWCA 「セーフスペースカフェ ここ*LOCO」

■新しく生まれた女性のための居場所

2025年度、神奈川県「困難な問題を抱える女性のための通所型支援」に採択され、平塚YWCA会館で11月にスタートした「セーフスペースカフェ ここ*LOCO」。困難や不安を抱える女性が仲間や居場所をもち、社会とのつながりを取り戻し、自立へ向かうことを目的としたジェンダー視点の支援事業です。

■ここ*LOCOが大切にしている4つのこと

YWCAは世界で「セーフスペース」を大切に、尊厳・アクセスのしやすさ・インクルーシブ性・安全性など10の基準を掲げています。この理念をもとに、平塚でここ*LOCOが立ち上がりました。

コンセプトは「心身の健康エネルギーチャージ」。支援される側ではなく、エンパワメントを回復する体験の場をめざし、

- ①「たべる」手作りの食事提供
- ②「まなべる」心のケア講座
- ③「はなせる」日常の悩みを話せる場
- ④「やすめる」ヨガやリラクソスの時間の4つを柱にしています。



■ほっとできる空間づくり

週3回開室し、性自認が女性であれば予約不要・無料で利用できます。スタッフ3名とコーディネーター2名で運営し、館内にはカフェスペース、食事スペース、ホール、バリアフリートイレ、ランドリー、シャワーを備えています。暖色の照明やソファ、手仕事ができるテーブルなど、細部にまで心遣いが行き届いた空間で、静かに過ごしても誰かと話しても良い、自分らしくいられる場所です。

開室から半年、利用者は徐々に増え、継続して通う人も多いといいます。「6月から土曜日はU35と設定し、35歳以下の若年女性がより利用しやすいよう工夫をしています」と東さん。若年女性や外国にルーツのある人にも届くよう、インスタグラムでは漢字にルビを振り、温かい色合いのデザインにするなど、ハードルを下げた発信をしています。必要としている人はまだ地域のどこかにいるはずで、今後はアウトリーチも課題だと話します。



(次ページに続く→)

(→前ページからの続き)

■地域の力とつながりのエンパワメント・安心できる場所を未来へ

「平塚は、誰かのために何かしたいという方が多いですね」。運営を通してスタッフが感じていることです。利用者もスタッフも、支援する・されるだけでなく、経験や感情を共有することで自分と向き合い、レジリエンスを高めていく。つながりの中で生まれる体験がエンパワメントにつながるといいます。必要な人に届き、その人たちのために安心・安全な居場所であり続けるために。「セーフスペースカフェ ここ*LOCO」は一歩ずつ歩みを進めています。



Instagramはこちら



③「平塚パトロール」

■25年間、路上に寄り添い続けて

平塚パトロールは、平塚市内を巡回し、路上にいる人に声をかけ、居場所を訪ねる活動を25年間続けています。これまでの歩みや社会の変化について、メンバーの佐藤さんと新藤さんに伺いました。活動は、第1木曜の夜は市街地から平塚駅周辺、第4日曜の朝は湘南海岸公園プール駐車場から防砂林を中心に、2~3名で行われています。

■活動の始まりとメンバーの思い

きっかけは2000年の全国一斉調査で、平塚が横浜・川崎に次いで野宿者が多かったこと。当時同様の団体がなかったため横浜の団体からメンバーが派遣され、2001年に立ち上がりました。地元教会関係者も関わり、創立メンバーの一人は今も活動を続けています。

代表を置かず、自由で思いやりのある人が集まるスタイルも特徴です。佐藤さんは2008年の「ボランティア博覧会」をきっかけに参加、新藤さんは2018年に加入し、現在も精力的に活動しています。

■続けられる理由と、向き合う現実

長く続けられる理由は、生活困窮者が自立に向かう姿を見られること、人との交流を通じて自分自身が豊かになる経験があるから。

一方で困難な場面に直面することもあります。 「命に関わることに繋がっていて学ぶことが多い」と、お二人は笑顔で語ります。



ホームページはこちら



■見えない課題に気づくために



コロナ禍でも活動は途切れず、むしろそれまで見えなかった人とのつながりが見えるようになりました。ネットカフェや道の駅などのセーフティネットが増え、路上生活者は減少傾向にあります。 「家の中に隠れる見えない困難」は増えているように思います。

だからこそ、声をかけて顔見知りになり、本人が話してくれる関係をつくるのが大切だと考えています。行政とのつなぎ役だけでなく、人間の尊厳を守ることや他者を思いやる心の大切さを伝えていきたいという願いがあります。

■これからの活動に向けて

メンバーの高齢化や健康不安もあるなか、支援する側が息切れしないよう、当事者の選択を尊重しながら地域課題の解決を目指していきたいと話します。メンバーの入れ替わりは多くありませんが、新しい参加も歓迎しています。

■“助けてと言える社会”の入口に

お二人の掛け合いはまるで漫才のように明るく、長年の信頼関係が伝わってきます。

「当事者に本当に必要なものは何か」を共有しながら、身体が続く限り支援を続けたい。野宿者への差別や偏見がなくすることを願い、今日も平塚のまちを歩き続けています。



佐藤さん(左)と新藤さん

特集号はいかがでしたか。

特集号
振り返り

センターには現在330を超えるNPO・市民活動団体が登録し、それぞれが地域の課題に向き合いながら活動を続けています。20年前と比べると社会の状況は大きく変わり、求められる支援も少しずつ形を変えてきました。その中で、団体同士が自然に手を取り合い、力を合わせて支援につなげる場面も増えています。平塚パトロールで出会った女性が「ここ*LOCO」につながったり、「フードバンク湘南」が食支援で協力をするなど、温かな連携が広がっています。

これからも、人や団体とのつながりを大切にしながら、暮らしやすいまち平塚を一緒につくっていかれたらと思います。活動に関心のある方は、ぜひセンターへ。

別冊版編集後記

「ひらつかの風」は、地域の課題と向き合い、解決に向けて活動するNPOや市民活動団体の取組みが、爽やかな風となって平塚市内外に広がっていきますように、そんな思いを込めて命名しました。

課題解決や見たい社会の光景に近づくために活動している方々の声をより一層お届けできるようにスタッフ一同頑張ります。

今後ともよろしくお願ひします。



編集・発行

ひらつか市民活動センター

(開館時間 9:00~22:00 年末年始、施設点検日を除く)

〒254-0045

神奈川県平塚市見附町 1-8

TEL ● 0463-31-7571 FAX ● 0463-35-6601

Eメール ● info@hiratsuka-shimin.net

URL ● https://hiratsuka-shimin.net

